

「干蘭」か「高床」か：日中建築比較論のこころみ

著者	井上 章一
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	江南文化と日本：資料・人的交流の再発掘，復旦大学（上海），2011年5月27日-29日
ページ	167-173
発行年	2012-03-23
シリーズ	上海シンポジウム 2011 International Symposium in Shanghai 2011
URL	http://doi.org/10.15055/00001156

「干蘭」か「高床」か

——日中建築比較論のころみ——

井上章一

1. 家のなかでは靴をぬぐ

今の日本で見かけるくらしよりは、そうとう西洋風になっている。

たとえば、朝から晩まで和服に身をつつむ人は、もうほとんどいない。たいていの人は、洋服ですごしている。家のなかでくつろぐ時は和服にきがえるという人が、20世紀のなかごろまではいた。しかし、そういうことも、今はほぼなくなっていると、みなしてよい。

家のづくりも、ずいぶん洋風化されてきた。昔からのかまえて家をいとなもうとすれば、今はそうとう高くつく。竹の小舞で大壁をこしらえる左官などは、わざわざさがさなければならなくなっている。20世紀のなかごろまでは、たいていの民家がこれでたてられていたのに。

しかし、家のなかで靴をはく人は、今でも、ほとんどいない。たいていの人が、入口のところで靴をぬぐ。そして、床の上でははだし、もしくは靴下かスリッパにはきかえてすごす。畳の上では、スリッパもゆるされない。とにかく土足をいやがるくらしが、日本ではたまたたえている。あるいは、上下足をわけるくらしが、と言うべきか。

かつては、個人宅にかぎらず、屋内のどこでも靴をぬぐことが、きまりとなっていた。つとめ先、劇場、百貨店といったところでも、土足はゆるされない。靴や下駄は下駄箱におくか、下足番にあずけ、上靴にはきかえていた。あるいは、足袋や靴下で、屋内にはあがっていたのである。

とはいえ、そういう公共的な場所は、しだいに土足をうけいれるようになっていく。西洋風のくらしを、とりいれていったのである。今、公共的な屋内で、上下足をわけているのは、大学へあがる前の学校くらいだろうか。

もちろん、さきほどのべたように、私宅では今でも土足をみとめていない。家屋のづくりそのものは、洋風化、現代化をすすめてきた。フローリングの床が、あたりまえになっている。畳の面積は、よほどせまくなってきた。にもかかわらず、土足だけはなかなかゆるされない。

これだけ、くらしが洋風化したのに、そこだけは昔のならわしをまもろうとする。家のなかへ土足であがるのが、それだけきらわれていることを、読みとれよう。民族的なこだわりの、それがよりどころとなっていると言ってもよい。

日本のホテルは、いっばんにスリッパを部屋のなかに、おいている。多くの日本人が、土足のまま室内ですごすことに、ためらいを感じるからである。私的な場所、寝るところとつながる場所では、靴をぬいでいたい。そんな民族の想いが、ホテルにスリッパをとと

のえさせたのだと考える。

この点は、スリッパなどおこうとしない欧米のホテルとくらべれば、きわだつ。まあ、このごろは、日本人用にスリッパをもうけているあちらのホテルもあるが。

こういう日本人の民族的と言っているいいごだわりは、床を高くはることにねざしている。地面の上に小さな柱を立て、その上に床板をはる。日常のくらしは、地面からきりはなした床板や畳の上で、いとなもうとする。そんな高床の家屋が、上下足のわかれるくらしをもたらしただと、みなしうる。わざわざ床板でもちあげたところに、地上ではく靴はもちこまないというように。

かつての日本家屋には、広い土間があった。町屋であると農家であるとかかわらず、たいい土間をもうけていた。そして、そこは、くらしをささえるいろいろな作業の場所にも、なっていたのである。台所仕事も、ここでこなわれていた。

敷居の高い、いわゆる名望家の家では、出入りの者を上へはあげなかったという。庄屋の屋敷では小作の百姓を土間のところへとどめていた。立場の弱い者にたいしては、高い床の上からむきあっている。土間と板の間は、ある種の身分をわけへだてる建築上の目印にも、なっていたのである。

床板や畳の上では、土足をぬぐ。このならわしも、どこかでは人をわけへだてるこのからくりと、つながっていよう。いやしい者どもをとどめておく土間とはことなる場に、床の上はしておきたい。俗に言う、そんな上から目線が、上下足をわけるくらしの根っ子にはあったろう。

そして、19世紀までは、板の間がない農家ものこっていた。とりわけ、東北地方の貧しい農家には、土間しかないというところもあったのである。

いや、それどころではない。地方によっては、小作の百姓に板の間をゆるさなかったところもあった。たとえば、1789年に米沢藩は、そういう触をだしている。新莊藩が1805年にだしたそれは、ひと間にかぎり板敷きをみとめていた。くらべれば、米沢藩よりものわかりがよかったと、言えないこともない。

しかし、いずれにせよ、床のありようは身分のわけへだてとも、かわりあっていた。建築のしつらいは、その区分けとひびきあう形で、うけとめられたのである。「殿上人」と「地下人」の対比を、建築家の上田篤は、そこから読みとっている（『日本人とすまい』1973年）。考えてみなければならない指摘である。

くりかえすが、19世紀になっても、土間だけでくらす人々はいた。そして、そういう人々に、上下足をわけるくらしは、とどいていない。彼らは、土間だけしかない家のなかを、土足ですごしていただろう。いや、季節によっては、家の外でもはだしだったかもしれない。いずれにせよ、上下足をわけてはいなかったと思う。

そういう人々のことを考えれば、日本人の民族的なならわしという言い方は、まずかろう。家の内と外ではきものをわけるくらしは、すべての階層へゆきわたっていなかった。江戸時代の藩によっては、それが下層へおよぶことを禁じたところさえある。だから、私に、民族的なという形容をつかうことへのためらいも、ないではない。

しかし、はきものをわけるくらしが、より上位におかれていたことは、たしかである。地面をあるく時にはいていたものは、板敷きのところへあがる前に、足からとる。そういうならわしのほうが、どこでも土足ですごすそれよりもみやびだとされてきた。そのこと

は、うたがえない。

そして、そこをみやびだとうけとめるところに、私は民族性を感じる。日本文化のかんどころもまた、そこにあると考える。あえて、民族的という形容をえらびとったゆえんである。

2. 平安の王宮のみなもとは

日本列島に仏教がつたわったのは、6世紀からである。これをきらった物部守屋が、585年に寺をやいたと、記録にはある。もうこのころには、寺をいとなんでいたことが、そこからは読みとれる。

これ以後、列島各地には、数多くの寺がたてられた。仏教の国教化がもくろまれたせいもあり、とりわけ、律令期には、寺の数がふえている。

8世紀までの初期仏教寺院には、しかし今とちがって、床がはられていない。金堂も講堂も、土をつきかためた基壇の上になっていた。今につたわる法隆寺にも、床はもうけられていない。

とうぜん、儀式は基壇の上で、おこなわれたはずである。修行や学問も。床板をぞうきんでふくことから、修行をはじめたりはしていなかった。そういう風景ができあがるのは、もっとあとになってからである。初期の仏教施設に板敷きはなかったし、上下足もわけるしきたりもありえない。まあ、位の高い僧は、椅子にすわっていたかもしれないが。

お手本となった中国の建築も、床板をはってはいなかった。基壇を地面にこしらえ、その上へ建物をくみだてている。とうぜん、こちらでも上下足をわけたりはしていない。その中国風が、そのまま日本列島にもとどいたのだと、みなしうる。

王宮でも、朝堂院の諸堂には、床板がはられなかった。宮廷の公式行事もまた、寺のそれとおなじように、基壇の上でくりひろげられている。天皇は、そのさい椅子に腰をかけていた。いわゆる玉座で、式にはのぞんでいたのである。

貴族たちの個人宅には、板の間がもうけられていただろう。彼らの私生活は、板敷きの上でおくられていたと思う。しかし、公的な儀式は、基壇の上ですすめられた。板などはない、中国的なかまへのなかに、ハレのふるまいはあったのである。それだけ、飛鳥・奈良時代は、中国の感化を受けていたのだということか。

だが、9世紀、平安時代には、これがあらためられている。王宮では、床板がはられるようになった。中国風の玉座は、つかわれなくなっていく。かわりに、板敷きの上へ畳の原型とおぼしき敷物をおくことで、天皇の座はととのえられた。ハレの場からは、この点についての中国臭が、うすめられていくのである。

もちろん、儀式に土足でのぞむことは、ゆるされない。儀式によっては、靴らしいものをはいていとなまれることもあった。しかし、それも土足ではない。屋外にあるくさいにもちいるはきものは、さけられた。板敷き用の、上ばきとよぶべきはきものが、そのさいはつかわれるようになっている。

王宮だけにかぎったことではない。仏教寺院でも、似たようなできごとがおこっている。基壇の上、つまり地面と地つづきのところで儀式をおこなうことは、しだいになくなった。かわって、板ばりの床にすわりながらいとなむことが、ふつうになっていく。こちらでも、

中国的ななまえからぬけだすうごきが、平安時代にはじまっているのである。

中国的なハレの舞台にたいするこだわりが、弱まった。そこに、板敷きですごく私的なくらしぶりが、首をもたげてくる。奈良から平安へのうつりかわりは、そのようなものとしても見えてくる。

いずれにせよ、土足をぬぐべき板の間が、公的な場をものみこんだ。そして、身分の低い人々は、土間の上でくらしている。ただ、彼らも、宮廷にならい、自分の家へ床板をはるようにはなっていく。そして、そのスタイルは、都の上層にいる階層から、地方の下層へとひろがった。19世紀には、東北の農山村を例外とすれば、たいていの地域へ普及するにいたっている。

板の上と下で、殿上人と地下人にわける。そんな身分意識も、板敷きへのあこがれを、どこかではささえていただろう。

地上をあるく時にはいていたものなど、板の上ではつかえない。板の上を上位におくこういう考えも、その根は平安の王宮にある。民族的なころごし、住生活における日本文化の源流をたどれば、平安時代にたどりつく。私は事態を、以上のようにとらえている。

13世紀からたてられだす禅宗寺院は、ふたたび床板をとりはずした。基壇の上で修行や儀式をおこなう形に、もういちどもどっている。中国風のゆりかえしが、このころにはあったのだとみなしうる。しかし、これがその後にも大きくひきつがれたというわけではない。この中国回帰は、一時的なできごとであるにとどまった。

すくなくとも、この趨勢が日本建築史のあゆみをひきいたわけでは、けっしてない。床板をひく、板敷きにする、できれば、畳もならべよう。ドミナントな流れとして、その後もつづけられたのは、そちらのほうである。13世紀の禅宗建築は、例外的な逆流であるにとどまった。

3. いわゆる国風文化論

「国風文化」という言葉がある。9世紀後半からの平安王朝、宮廷でさかえた文化をそうよぶことがある。いや、よぶことがあったと言うべきか。

9世紀前半までの朝廷は、中国に強くあこがれていた。平安時代初期の嵯峨・淳和朝で、唐風の漢詩文がよろこばれたことは、よく知られる。唐の律令を手本として、まつりごとのありかたをととのえた。そんな8世紀からの唐風熱が、9世紀のはじめにいただきをむかえていく。そのところだけを例にとれば、以上のようにもみなしうる。

だが、9世紀のなかごろからは、日本独自の文字である仮名が、つかわれだす。仮名をもちいた和歌や仮名文学が、こころみられるようになった。いわゆる大和絵がえがかれだすのも、このころからである。中国の影響からは、距離をおこうとする。そんないきおいが高まりだしたのは、まちがいない。

そのことが、日本の学会では、「国風文化」の抬頭として、かつて語られた。このよびかたをひろめたのは、国文学の学会である。1930年代ごろから、ことあげされだした。その後は、日本史や美術史の分野でも、とりざたされるようになっていく。

9世紀末には、遣唐使を中国へおくりこむことが、とりやめられた。このことを「国風文化」のもりあがりとかからめる声も、以前はよく耳にしたものである。国ぶりにめざめた

日本は、唐の文化によりかからなくなった。それで、遣唐使もいらなくなったのだという説明も、一部ではこころみられたりした。

しかし、近年はこうした物言いに接することが、よほどすくなくなっている。

まず、遣唐使だが、唐からの文物を日本へつたえていたのは、遣唐使にかぎらない。民間の商船も、多くの唐物を日本へはこんでいる。遣唐使がなくなっても、文化の伝播じたいがとまったわけではない。むしろ、商船のさかんなゆききが、遣唐船を不用にした。わざわざ政府の肝入りであんな船をださなくてもよくなったのだと、見たほうがいい。

外交史の榎本渉は、事態をそうとらえている（『僧侶と海商たちの東シナ海』2010年）。この見解は、遣唐使の廃止と「国風文化」を関連づけるより、よほど機微をついている。近年の学会動向を代表する、またその最右翼をいく読みときである。あるいは、最左翼とすべきか。

また、「国風文化」の中核をなすとされる文学についても、見なおしがはじまっている。近年はそこに漢文学からの感化をみとめる仕事が、ふえてきた。『源氏物語』や『枕草子』などの、中国的なところへ光があたるようになっていく。それらを、国風化された漢文学としてとらえる流れが、学会では強められてきた。

平安王朝の王宮が、唐物でみちあふれていたことも、今では常識になっている。もちろん仮名がこの時期に形づくられたことは、まちがいない。あるていど、民族精神がはたらいたことは、いなめないだろう。それでも、ことを鎖国的にとらえる言及は、よほどへっている。「国風」とされたことどもを、漢文明の周辺へ位置づけるのが、今のはやりだと言ってよい。

私も、今は「国風文化」論がひねりだされた背景に、興味をいだいている。1930年代の対中国観は、それをどのぐらいあとおししたのだろうか。あるいは、明治時代以後の国文学というかまえに、そもそも根っ子はあったのか。いずれは、そこへわけいり、さぐってみたい。

話を建築にもどす。屋内での土足をいやがり、床に板をはる。民族的と言ってよいこのこだわりは、平安時代にうかびあがってきた。その意味では、建築における「国風文化」のめばえが、この時期にあったと言えなくもない。

平安時代の宮中に生きた女性たちは、十二単を身にまとった。長ったらしい桂（うちき）をかさねたあのいでたちは、基壇の上だとなりたたない。服の裾が地面とこすれ、すぐいたんでしまうだろう。板の間だからこそ、ああいうかっこうでもくらしていけた。われわれがよく想いえなく平安時代の王朝絵巻は、板ばりの床こそがさえていたのである。

近年の学説は、9世紀以後も唐物の流入が続いたことを、言い立てる。「国風」と思える文学も、漢文学にもとづいていることを強調する。王朝人は、彼らなりに中華文明をうけいれていたと、そう言うべきなのかもしれない。

しかし、その土台をなしている床は、漢文明からそっぽをむいていた。宮廷をいろうどたらう唐物も、床板の上へならべられていたのである。中国的であるとは、おおよそ言いがたい板の間に。

しかし、こういうくらしぶりを「国風」と言ってよいかどうかは、わからない。すくなくとも、じゅうらい語られていた「国風文化」とは、ずいぶんちがっている。私は、この名をそえることに、ややためらう。

今までの「国風文化」論は、9世紀後半からのそれをさしていた。嵯峨・淳和朝の漢詩文熱をのりこえた、そのあとに時代の焦点をあてている。だが、板敷きの宮廷生活は、その嵯峨・淳和期もふくんでいた。あの漢詩文熱が、床板とともにあったことを、私は大きくとらえたい。これまでの「国風文化」論からは、距離をおきたいと思うゆえんである。

4. 黄河か長江か

中国に「干蘭」という言葉がある。「干欄」あるいは「干闌」とも書く。西南中国の少数民族がいとなく高床住居のことをさす。「干蘭」に言及する著述家たちは、高く床をはった彼らのすまいを、見下してきた。未開の、鳥の巣めいた家屋だと、うけとめてきたのである（田中淡「先秦時代宮室建築序説」1980年）。まあ、北京オリンピックの主会場も、鳥の巣とよばれはしたが。

長江流域の浙江、江蘇、湖北、各省でも、有史以前の高床建物跡は、よく見つかる。そのもっとも古いものが、杭州湾の河姆渡遺跡で、ほりあてられてもいる。かつては、長江流域以南にこれのひろまっていたことが、よくわかる。

また、東南アジアの島々へゆけば、今でも多くの高床建物を見いだせる。事態はあきらかである。黄河流域にはぐくまれた漢文明は、勢力をひろげこれらをけちらした。彼らから「干蘭」と馬鹿にされた建物は、より南のほうへにげていく。それが、東南アジアの島々などへちらばっているのだと、みとめうる。

日本列島にも、有史以前からこういう高床建物はたてられていた。いくつもの考古学資料が、そのことをうたがいない事実として、しめしている。その意味では、日本列島もまた「干蘭」のたちならぶところであったと、言ってよい。漢文明にほろぼされた長江起源のすまいを、東南アジアとともにわかちあう。日本列島が、そういう地域のひとつであったことも、まちがいないだろう。

今日に痕跡ののこる高床建物が、それぞれどうつかわれていたのかは、わからない。あるものは倉庫であったろう。住居としてたてられた高床も、あったかもしれない。私は否定的だが、神殿説をまきちらす考古学者も、なかにはいる。

いずれにせよ、7、8世紀の王都からは、ハレの場からそれらが姿をけしだした。寺院や王宮などは、漢文明と同じで、基壇の上にきずかれだす。日本の都市も、高床を「干蘭」と見下す側へ、一時的にくみこまれていった。「干蘭」をとどめる伊勢神宮などは、森のなかにひっそりたてられたのである。

だが、王都の建物は、平安時代になり生まれかわる。ふたたび高いところへ床をはるようになった。といっても、もとの「干蘭」＝高床建物にもどったわけではない。漢文明、隋唐の建築様式をぞんぶんにすくいとったうえで、高い床をとりもどした。

中国では、黄河流域の基壇建物が、長江流域の高床建物をおいおとす。後者は、前者から駆逐された。しかし、日本列島では両者がとけあっている。黄河流にそめあげられた長江起源の建築が、なりたった。そして、以後の日本建築をひきいる役目を、はたしている。私はここに、中国ではうかがえない、日本建築史の個性を読みとりたい。

9世紀に床板をはりだした宮廷人たちは、このことをどうとらえていたのだろうか。ざんねんながら、そのあたりの心性を書きとめた記録はない。

しかし、律令以前の姿へもどるというところごしは、いだいてなかったろう。西南中国の少数民族や東南アジアとの接点にも、気づけなかったと思う。高床への回帰は、無意識のうちになされたような気がする。

だが、とにかく、かつての長江流域とつうじる回帰が、9世紀にははじめられた。彼らがえらびとったのは、国際的なひろがりもある床なのである。そう言えば、韓国やラオスなどでも、屋内には床をはり、靴をぬいでいる。私はこれを単純に「国風」とは名づけたくない。「国風文化」論へよりそうことをためらう、もうひとつの理由はそこにある。

9世紀後半からの宮廷人が、何をめざしていたかは、これからも議論されつづけよう。漢文学か、国風の文学か。あるいは、大和絵か唐物か。そして、それらは彼らの意識を問うことで、うかびあがってくる議論である。私は、彼らの無意識があゆみよったであろう文化を、ここでは問題にした。

余談だが、中国の都市部では、家のなかで靴をぬぐくらしがうかびあがりだしている。ここ20年ほどの現象で、マンションなどにも、スリッパがひろがりだしてきた。日本で言う下駄箱、靴入れの売り上げも、のびているらしい。

いわゆる開放政策のおかげで、消費生活がゆたかになってきた。都市部ではきれいな室内もふえている。そのため、土足でこれをよごしたくないという気分が、高まった。上下足をわけるくらしのひろがりだした理由は、いっばんにそううけとめられている。

しかし、欧米では、今も土足で家のなかへあがるくらしが、つづいている。スリッパも、あまり普及していない。そして、欧米のすまいも、やはりきれいにできている。にもかかわらず、上下足をわけてはいない。

くらしがゆたかになったことは、土足をさきう決定的な理由にならないようである。中国の都市部は、ほかの事情で家のなかから靴をしりぞけたのだと考える。

興味深いことに、多くの中国人は、この新しいスタイルを都会的なそれとしてうけとめている。家では靴をぬぐのが、一種のハイ・ライフなのだ、と。

どうやら、基壇の上で靴をはきながら宮廷の儀礼をこなした伝統は、衰弱したらしい。床が高く上げられた未開人の家を「干蘭」と見下したことも、わすれているようだ。あんがい、文化大革命をへて、二千年来の漢文明はくずれだしているのかもしれない。